

# 早稲田大学本庄高等学院 2013年度学校自己評価

## はじめに

2013年度は、12年4月に竣工した95号館での教育・研究2年目の年であった。「新校舎」という名称も、徐々に使われなくなるとともに、落ち着いた環境のもとで教育・研究が展開された。現制度で6度目となる13年度の学校自己評価は、12年度と同様、まず各専任教員が、生徒による授業評価、保護者の本学院の教育に対するアンケート等を参照しつつ、授業・卒業論文・クラブ活動・研究活動等についての評価を行ない、さらに本学院内の教務室・各委員会・各学年・事務所等の部署がそれぞれの活動の評価を行なった。そしてその上で、学校評価運営委員会がそれらを理念・目的、教育活動、生徒、研究活動、教育研究施設、社会・大学との連携、管理運営の6項目にまとめて評価を行なった。本自己評価が14年度以降の教育・研究の改善に資することを望むものである。

## I. 理念・目的

早稲田大学は早稲田大学教旨に示された3つの建学の理念、「学問の独立」・「学問の活用」・「模範国民の造就」に基づき、教育・研究を続けている。その上に、00年に「21世紀の教育研究グランドデザイン」を発表し、08年には創立125周年を契機に「Waseda Next 125」を策定して「早稲田からWASEDAへ」をスローガンに定めて広く世界で活躍する人材の育成に努め、グローバルユニバーシティとして構築することを目指すとした。さらに創立150周年を展望した「Waseda Vision 150」を12年11月に策定し、「アジアのリーディングユニバーシティ」として世界に貢献する大学であり続けるためのビジョンを社会に公表し、目指す方向性を明らかにしている。

本学院も「Waseda Vision 150」に関連し、12年11月、「本庄高等学院の将来構想」を発表した。すなわち地域の特色を生かした「森に想い土に親しむ」教育をいっそう発展させた「大久保山学」をテーマに、教科横断型の教育・研究活動を通して、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成することである。

本学院は早稲田大学での一貫した教育体系の中に位置づけられ、卒業生全員が早稲田大学の各学部に進学すると規定されている。したがって本学院は、早稲田大学教旨・「Waseda Vision 150」、そして「本庄高等学院の将来構想」に基づいて教育・研究活動を行なうことが目的であるが、生徒に対しては、知的関心を高め、論理的な思考力、豊かな感性を育成し、さらに大学における専門的な学問の分野も模索させ、また大学での幅広い本格的な学問研究に必要な基本的な学力・体力を養成することを目指している。

## II. 教育活動

### ①授業

#### a. 必修科目

13年度入学生から新教育課程が始まったが、理科が「化学基礎」・「生物基礎」・「物理基礎」・「化学」・「地学基礎」となり、また外国語は「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、「英語表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」に、情報は「情報の科学」となったことが大きな変更点であ

った。授業は、12年度の生徒の授業評価等を分析・検討した上で実施されたが、95号館での授業も2年目となり、12年度以上に、書画カメラやブルーレイなどの機器を有効に活用した授業が展開し、またレジュメを多用するなど生徒の理解度に意を配った授業が行なわれた。

「公民」におけるプレゼンテーションや質疑応答の技法の演習、「体育」におけるダンスや生涯スポーツにつなげる工夫、「音楽」における多様な音楽に触れさせる試みなども特徴的な授業と言えよう。

授業を展開していく中での大きな問題点の一つが、英語の学力差が年々大きくなってきてること、社会問題全般に対する関心度の差等が「英語」や「地理歴史」・「公民」の授業を実施する上での難しさにつながっていることである。こうした問題に対しては、小テストの頻繁な実施や追試、補習等によって解決を図った。

今後の課題としては教員の授業力向上のための施策の充実などが挙げられる。

#### b. 選択科目

第3学年の授業時間数の約半分が選択科目であり、生徒は7講座（14時間）を選択することになる。13年度に設置した講座数は、人間科学部提供のオンデマンド科目がなくなったことなどから12年度より減少し、87講座となった。当初98講座が用意されたが、11講座は規定の受講生（SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）科目は5名以上、その他の科目は10名以上で開講）が集まらず、開講されなかった。逆に選択必修科目のうち5講座では募集定員を大きく超える受講希望者がいたため、クラスを2ないし3分割して対応した。

多くの選択科目は学部進学を見すえて授業を行なうことになるが、13年度には英語力について具体的な基準を設定する学部が多くなった。そこで「英語」では定期試験はGTEC、TOEIC、英検のスタイルに倣った形式とし、自力学習のスキル向上が得点につながるような意図をもった試験を実施した。また理工3学部の要請に対し、「数学」では到達度試験、「化学」では小テストやその追試によって、基礎学力を確実に身につけさせた。さらに「法学入門」では受講生の議論を深めること、「近現代の世界」では論文執筆指導やプレゼンテーション技術の進展を図った。

#### c. 卒業論文

原級生も含め344名が提出した。平均点は78.2点（100点満点）で、例年と大きな相違はなかった。そのなかで「クロスにおける異形葉性の規則性」が学院賞を受賞した。

卒業論文のための時間が設定されていないなか、各教員は放課後や夏期・冬期の長期休暇の直前、あるいは休暇中に個別指導を行なうなど工夫を重ねたが、教員と生徒の日程調整はかなり難しかった。それをEメールの利用である程度補ったが、指導体制の整備は課題として残ったままである。

生徒の間の卒業論文に対する取り組み方の差は大きい。長期休暇中も連日のように実験に明け暮れたり、頻繁に教員のもとに経過報告や相談に来る生徒がいる一方、提出期限が近づいてもテーマさえ設定できない生徒もまま見られた。また資料を読みこなすための基礎的な学力が不足している者、卒論にかける時間が決定的に足りない者も少なくはなかった。

論文提出後の口頭試問は義務とはされていないが、多くの教員は実施している。口頭試問の段階で一定時間教員と話す中で、初めて論文の意義を認識する生徒も多々見られ、その教育的効果は大きいと言えよう。

今後の課題の一つは、Course N@viを活用した進行状況の公開、オンラインディスカッション等、ネット環境を活用した指導方法の確立である。一方、電子情報のみでなく、活字の基本書の活用も指導する必要があろう。

#### d. 卒業論文報告会

2月19日（水）に第2学年を対象に、卒業論文報告会を開催した。報告会の目的は2つあるが、その1つは次年度に卒業論文を執筆する第2学年生徒に対して卒業論文を意識させ、できるだけ早い時期からの作業を促すことである。もう1つは論文とレポートとの違いを認識し、第3学年生徒の執筆過程を参考に、自らの研究計画を立てられるようにすることであ

る。報告会当日は、12年度と同様に、本学院生3名と慶應義塾湘南藤沢高等部生1名が報告し、また、慶應義塾湘南藤沢中高等部の教員から講評を受けた。

本学院側からの報告者3名は進路指導委員会で選定した。その基準は、フィールドワークや実験・観察、文献による裏付けなどの努力の跡が見られ、さらにデータによって実証的に論じる手続きが聞く生徒にとって理解しやすいもの、内容がプレゼンテーション向きであり、第2学年生徒が聴くに値する作品であるもの、また著者自身が真にそのテーマが好きで楽しんでいる様子が窺えるものであった。論理的思考の重要性や、身近な話題の中にも論文の題材となりうる事柄があるということを示し、プレゼンテーションの際の様々な技法の参考にもなりうると考えた。例年は自然科学、人文科学、社会科学の各分野から、それぞれ1名ずつ選出していたが、13年度はそれにとらわれることなく選出した結果、自然科学系1名、人文科学系3名（本学院生2名、慶應生1名）という構成となった。報告会当日の会場の運営は政治経済部員に依頼し、司会は同部第2学年生徒が行なった。

報告の題名は以下の通りである。

「ビートルズの歌だけを用いて中学校の英語教育をすることは可能であるか。」

「クワにおける異形葉性の規則性」

「『鋼の錬金術師』研究 -家族の「拡大」と血縁への帰結-」（慶應生）

「競技かるたと音のつながり」

報告会では各報告に対して数件の質問があった。静かに聞くだけでは学院生として物足りない。報告者と聴衆の間に、節度をわきまえた礼儀正しい活発なやり取りがあるのは非常に好ましい。

## ②課外教育

### a. 体育祭

5月30日（木）に学校行事の一環として、体育行事実行委員の生徒が中心となり実施した。男女共学化以後、男女混合8クラスとなって、格闘系の種目を毎年変更してきたが、13年度は綱引きとなった。毎年のことであるが第2学年のSSHクラスの女子人数が少なく、種目と参加人数の調整に難航したが、クラスごとに各種目の参加人数を調整し、全員が1種目必ず参加できるようには確保できた。運営においては、できる限り実行委員の生徒が率先して運営するように指導し、審判は陸上部の生徒が行なうことで円滑に進行できた。今後は、男女共学における新しい体育祭種目を検討していくながら、生徒にとってさらに価値ある行事としていくことが望まれる。

### b. 早慶野球戦観戦

例年通り、第1学年の学年行事の一環として、6月1日（土）に実施した。早慶戦独特の雰囲気に、生徒たちも早稲田への入学を改めて実感できたと思う。試合も8対4の打撃戦で、点が入るごとに肩を組んで「紺碧の空」を歌う回数も多く、早稲田への帰属意識の涵養に大きな効果があったようである。試合後のエール交換まで興奮は続き、目的は十分に果たせたものと思う。

### c. 人権教育

埼玉県警サイバー犯罪対策課小林伸裕氏、スクールネットアドバイザー松岡真澄氏によるスマートフォンや携帯を中心としたネット使用の注意点に関する講演を行なった。特に、スマートフォンやブログの落とし穴、違法ダウンロードの危険性、ネットの世界は匿名ではないこと、冗談半分の写真投稿（アルバイトテロ）による逮捕事例について学習した。

### d. 球技大会

第3学年の修学旅行期間の10月3日（木）に、第1・2学年で実施した。種目は男子はサッカー・ソフトボール、女子はバレーボールで、学年別・クラス対抗・全員参加で行なった。2年生SSHクラスの女子が少なく、12年度はSSHクラスのA組とH組の合同チーム編成としたが、13年度はクラス単位の参加となった。審判は男子サッカー部・野球部の協力で運

當もスムーズに行なうことができた。女子のバレーボールの審判は体育科の教員に加えて男子バレー部の生徒が可能な限り手伝った。球技大会全般としては男女とも盛り上がり、クラスのまとまりも見られた。

#### e. 秋の学年行事

第1学年は、10月4日（金）にぶどう狩りを中心とした遠足を行なった。4クラスずつ、懐古園からのコースとぶどう狩りからの2コースに分けて行なった。天気もよく、生徒たちには楽しい一日になったようである。

#### f. 稲稈祭

10月26日（土）・27日（日）に開催した。台風の影響で開催が危ぶまれたものの、両日合わせた学外からの来場者は約2100名であった。

運営は生徒会執行部（7名：会長・副会長・書記・会計）と稲稈祭実行委員会（48名）によって担われた。発表・展示の内容は、学院生企画・同窓会企画・生協食堂に分かれるが、そのうち学院生企画はクラス企画・公認団体企画・有志団体企画・校内装飾・モニュメント・大教室・屋外ステージ企画・共通棟体育室企画で構成された。13年度は校内装飾に特に力が入れられ、実行委員長を中心に委員会もよくまとまり、大成功であった。

#### g. 芸術鑑賞教室

11月6日（水）、本庄市民文化会館において東京演劇アンサンブルによる演劇「ラリー～ぼくが言わずにいたこと～」を鑑賞した。ネット時代を主題にしたものであり、インターネットの書き込みが引き起こす学校生活、家族、恋、社会問題がとりあげられていた。主人公は17歳ということもあり、生徒にとって考えさせられる芸術鑑賞教室となった。

#### h. マラソン大会

12月14日（土）に行なった。12年度は95号館完成により、3年前と同じ距離に戻して開催できたが、13年度は野球場と陸上競技場の間に通行ゲートが建設されたため、これまで同様のスタート位置が使えず、野球場内からスタートさせ、距離は従来よりも600mほど短く、男子10km、女子4.6kmとなった。また本庄早稲田駅南の地点は、12年度は警察の方の立会いが必要であったが、13年度は当該地点に信号が設置されたため、30mほどコの字型に迂回する形とした。心配されたスタートはまずまずスムーズに行き、マラソン大会としては大きな事故もなく終了することができた。男子と女子のスタート時間を15分ずらしたにもかかわらず、ゴール地点で男子の上位群と女子が多少重なってしまったが、ゴールの記録と順位カード渡しは比較的スムーズに行なうことができた。

#### i. 課外講義

13年度は課外講義の一層の充実を企図した。

まず4月9日（火）には第1学年オリエンテーションの一環として、「交通安全講話」を実施した。本庄警察署員による講話で、主に自転車の安全走行に関する内容であった。近年、自転車通学の生徒は減少しているが、自らが加害者にも被害者にもなりうることを具体例で示す内容で、生徒の受講態度も良く、交通安全への啓発を効果的に行なうことができた。

保健関係では、5月16日（木）に第1学年を対象に、学生相談室の心理専門相談員による「こころの健康」、6月13日（木）に第3学年を対象に、「青年期のセクシャルヘルス」、さらに10月31日（木）に第2学年を対象に、「喫煙・飲酒・薬物乱用予防」の講義をそれぞれ学外から講師を招いて実施した。健康に関する知識を深め、意識を高める目的で実施しているが、生徒は概ね興味を持って聞いていた。講師の選定や実施時期等については、各学年の要望を反映しているが、内容についても、毎年検討することが必要である。

また、SSH特別講義として「量子力学の不思議と量子情報科学～近未来の情報テクノロジー～」と「科学の最前線『超伝導』を体験してみよう」、「AR（拡張現実）の技術と学習環境での活用」、「どうやって小さい現象を観るのか？一光で観える限界がある？！」

および「クルマは如何に人間に近づけるか？—自動操縦技術の現在と未来—」を実施した。さらに、年間6回のシリーズとして「これがサイエンスだ」を実施した。毎回20名ほどの生徒が熱心に受講していた。

### ③課外活動

#### a. 生徒会活動

主な活動は、生徒会予算作成、諸活動の企画・運営であるが、具体的には生徒総会の開催、国内外交流プログラムへの参加、稲稟祭の運営であった。13年度の執行委員は、全体的に生徒会活動をより活発にしようとする姿勢が大いに見られた。特に稲稟祭実行委員との連携がよく取れ、稲稟祭成功の一因となった。また14年度のより適切な予算作成に向け、2月から公認団体代表者と連携を図り、下準備が着々と進められた。教員の関与は最小限にとどめ、自主的な生徒会活動が展開されるよう指導した。今後も、さらに自主的な生徒会活動が展開されるような指導が必要である。

#### b. クラブ活動

12年度と同様、文化部門25、体育部門17のクラブが活動した。クラブの活動目的は心身の成長を目指すもの、より上位の大会での成果を目指すもの、稲稟祭での発表に力を注ぐもの、部員の親睦を図るものなど異なるが、各クラブはそれぞれの目的に向かって活発に活動した。

大会での上位の成績を目指すクラブの13年度の主な成績は次の通りである。

硬式テニス	女子シングルスインターハイ出場 女子全国選抜高校テニス大会（団体・個人）出場
硬式野球	秋期8校トーナメント優勝
自転車	公式戦参加
スキー	回転インターハイ出場
陸上	男子200m高校総体全国総体5位入賞 400mリレー全国高校総体準決勝進出 1600mリレー北関東大会出場 県高校駅伝8位入賞
落語	女子1600mリレー埼玉県新人大会6位入賞 「漫才甲子園」出場
S S H	水環境保全活動奨励賞（水環境保全学会関東支部） J S E C審査員奨励賞・佳作

学内や地域での活動を主な目的とするクラブの13年度の主な活動は次の通りである。

体操	体作りを中心に色々な技へ挑戦
EMANON	個々の部員の興味・関心に基づく活動
ESS	World Youth Meeting 2013・WaISES参加
グリークラブ	自由度を高く保ちながら自分が本当に歌いたい歌を歌う
プラスバンド	生徒の自主性を尊重し、自分たちで音楽を作り、楽しむ
演劇	稲稟祭公演
応援	学校行事出演
化学	合宿・実験
天文	合宿・実験

### ④国内外交流・研修

#### a. 修学旅行

13年度の修学旅行は、当初の予定では北京・台湾・韓国の3コースであったが、国際情勢の不安定化のため北京コースが中止となり、沖縄コースに切り替えられた。コースの選択は生徒自身による自由選択で、すべての生徒が第1希望のコースに参加した。参加人数は、沖縄コース63名、台湾コース150名、韓国コース111名であった。各コースともに、単なる観光旅行ではなく、事前学習から研修テーマを明確にした取り組みとなり、生徒自身の価値観

形成、人生設計につながるような修学旅行となった。台湾・韓国コースではそれぞれ台中第一高級中学（台湾）・安養外国语高等学校（韓国）を訪問し、同世代の高校生と交流するなかで、共に地球の未来のために何ができるのか考えるきっかけとなった。3コースとも無事に日程を消化することができた。旅行の目的を達成し東アジアの一員としての体験したことを、今後の人生を豊かに生きるため、また、社会に貢献するためにさまざまな場面で活かしてほしいものである。

b. 他校との交流

5月29日（水）に台中第一高級中学（台湾）の生徒と教員約60名が来校し、本学院生徒（約50名のバディ、ESS部、応援部、SSH部、生徒会など）と交流を行なった。歌やダンスの発表やSSHクラスの授業体験（理科実験）などの交流も行なわれた。

9月10日～9月19日の日程で開催された「にほんご人フォーラム2013」に生徒2名が参加した。

ジョグジャカルタ第2高校（インドネシア）とのフリーペーパープロジェクトを通しての交流は11・12年度に続き、13年度も行なわれ、3月に英語雑誌『FP』を発行した。

c. 海外プログラム（SSHを除く）

13年度に参加した海外プログラムは以下の通りである。

1) 9th International Senior High School Intelligent Ironman Creativity Contest

台湾教育部が主催し、台湾全土の高校生を対象として行なっている創造性養成のためのコンテストで、3日間で与えられた課題に取り組み、創造性・体力・知力が問われる。03年に開始されたが、05年からは数か国を招いての国際大会となった。本学院は台湾政府の招待を受け、第1回から参加している。第9回目となる13年度は7月31日～8月7日の日程で開催され、生徒6名が参加し、パフォーマンス部門と総合部門で優勝した。

2) World Youth Meeting 2014

日本福祉大学主催の国際プレゼンテーションイベントで、本学院からは毎年参加している。10回目になる13年度は生徒12名が参加し、ジョグジャカルタ第2高校と協働発表を行なった。

3) 日韓高校生交流キャンプ

日韓経済協会が主催する文化や観光をテーマに市場調査やビジネスプランを作成・発表するプログラムで、生徒1名が参加した。

d. 留学

第2学年男子生徒1名が、2013年4月8日～2014年3月21日の間、アメリカ合衆国カリфорニア州のLynbrook High Schoolに留学した。また12年9月から留学していた中国福州市の男子留学生が、7月に帰国した。

⑤SSH（スーパーサイエンスハイスクール）

本学院は02年（SSH元年）にSSH制度開始とともにその指定を受け、以後、05年に再指定、10年に再再指定されて現在に至っており、全国のSSH校の中で最古参である。13年度実施した主なプログラムは以下の通りである。

1) 河川調査プロジェクト

大学院創造理工学研究科社会環境工学科研究室・本庄市・NPO法人・埼玉県環境科学国際センターとの連携で行なう市内河川の水質改善活動であるが、13年度も12年度に続き、本庄市立藤田小学校との連携活動を行ない、同小学校の年間総合学習の講師を本学院生徒が務めた。

2) Waseda-NJC (Singapore National Junior College) Exchange Program

8月10日～16日に生徒10名をシンガポールに派遣し、シンガポール動物園や植物園におけるワークショップ、NJCの授業・実験等に参加した。また事前事後にテレビ会議も行なった。11月1日～7日にはNJCからの生徒・教員12名を本学院に受け入れ、各種博物館

におけるワークショップ、オリンピック青少年センターにおける合宿交流、授業交流・文化交流・共同研究ミーティングなどを行なった。

3) S S H全国生徒研究発表会

8月7日～8日にパシフィコ横浜で開催された全国のS S H校の研究発表会に参加した。

4) 静岡北高等学校科学技術フォーラム（SKYSEF）

8月3日～6日にS S H校である静岡北高等学校主催の国際高校生学会に生徒3名が参加し、研究発表・課題研究・企業見学等を行なった。

5) Japan Super Science Fair

11月8日～12日に立命館琵琶湖草津キャンパスで開催された立命館高等学校主催の大規模な国際高校生学会である。生徒3名が参加し、研究発表・課題コンペ・講義・遠足・文化交流等を行なった。うち1名はNJCとの共同研究発表であった。

6) 白梅科学コンテスト

12月21日に小田原高等学校で開催されたが、生徒1名が招待参加し、研究発表を行なった。

7) 海洋開発研究機構研修

12月16日～17日に横須賀の海洋科学研究機構で深海の研修・水圧体験を行ない、講義を受けた。

8) 小笠原研修

8月27日～9月1日に生徒10名の参加により実施した。小笠原諸島の父島・母島で希少植物の調査、海洋生物の観察を行ない、自然保護区である南島においてワークショップ等を行なった。また、母島では小学生に向けて、子供科学教室を実施した。

9) 関東近県合同発表会

3月23日に玉川学園高校（東京都町田市）で開催された東京都近辺のS S H校による合同生徒研究発表会であり、3つのテーマに生徒9名が参加した。

10) Waseda International Science and Engineering Symposium 2013 (WaISES 2013)

12月17日～21日までの期間、国外から6校、国内から5校を迎えて、高校生のための科学シンポジウムをS S H科学技術人材育成重点枠の予算にて主催した。開会式、歓迎夕食会、研究発表、文化交流、科学コンペ、校外研修、閉会式など、盛りだくさんであった。この運営には、生徒の実行委員会の活躍が大きく寄与している。

11) Taiwan HSP／Japan SSH Science Education Exchange Symposium (SEES2013)

8月16日から20日まで、台湾のH S P校（H S Pは日本のS S Hに相当）と日本のS S H校とが合同で行う科学教育交流シンポジウムが台湾の高雄市にて行われた。本学院からは4名の生徒が参加した。

12) 水中ロボットコンベンション

S S Hクラブロボット班が海洋研究機構（横須賀）に行き、自立航行ができる潜水ロボットを製作し、大学生や大学院生と同じ土俵でコンテストに参加し、海洋研究開発機構理事長賞と高校生部門賞2位を獲得した。

13) 南三陸研修

7月27日から29日まで、南三陸町・北上川河口・いわき市周辺を訪れ、津波災害による自然環境の影響・被災地復興の今後に関する講義および河川調査、正しい放射線理解、原発事故の現状と今後に関する講義に参加した。

14) サイエンスアゴラ

11月9日・19日に都立産業技術研究センターで開催された日本で最大の科学の祭典である「サイエンスアゴラ」に出品した。本学院からは潜水艦による水底の放射線を測定する方法の紹介や、希土類元素の分離方法などを説明があった。

その他、「川の探検隊」への生徒講師派遣（1回）、子供科学教室の開催（6回）などの地域還元を行なった。

一方、S S H体制については12年度に文部科学省からの中間評価が行なわれ、以下の6項目の指摘を受けた。

① 学校全体の取組とするための現状分析と改善

② 教員の意識や指導力を高めるための相互研鑽の取り組み

- ③ 理系進学者減の原因分析と対策
- ④ 生徒の課題研究における、生徒の視点からの探究活動の促進
- ⑤ 高大接続の取り組みの改善
- ⑥ 運営指導委員に教育改善に資する委員を入れること

以上の指摘に対して本学院では改善策を検討し、①・②・③・④については、「Waseda Vision150」における本院の将来構想に連携させ、13年度からキャンパスを利用した総合的な取り組みである「大久保山学」の中で有機的に推進する枠組みを模索した。特に①についてはSSH活動をより広く周知するために生徒向けのSSH関連事業の説明会を開いたり、教員向けの広報誌を配布したりした。②については、大学のWebシステムであるCourse Naviを援用する枠組みの構築を行なった。⑥については既に委員1名を増員している。また⑤については大学教務部と連携して具体的な方策の検討を開始しており、大学教員を招いてサマーセミナー・ウインターハイクを行なったり、大学院との連携を行なったりした。

## ⑥高大一貫教育

### a. 学部説明会

第2年を対象に、6月1日（土）に早稲田キャンパス・西早稲田キャンパス・戸山キャンパスで例年のように午前中と午後の部に分けて各学部からの説明を受けた。早稲田キャンパス14号館に午前9時に集合させ出席をとつてから、政治経済学部・法学部・商学部・教育学部・社会科学部からおよそ20分ずつ説明を受けた。午後は理系志望者は西早稲田キャンパス、文系志望者は戸山キャンパスへそれぞれ移動した。理工3学部については、学部説明の後、学生の案内により各施設の見学を行なった。文学部・文化構想学部は説明後、およそ午後3時には終了し現地で解散とした。

国際教養学部・人間科学部・スポーツ科学部については時間の制約から9月25日（水）の午後、本学院でそれぞれ約30分の説明を受けた。

6月の説明会、9月の説明会、いずれも生徒からアンケートをとったが、それによると、学部進学への動機付けという点からは概ね肯定的な反応が得られた。特に大学キャンパスでの説明会では、生徒は早稲田界隈の様子も体験することができ、良い刺激になったようである。

### b. サマーセミナー

7月16日（火）・17日（水）に、13学部から16名（政治経済学部・法学部・教育学部各2名、その他は各1名）の教員を招き、16講義を開催した。12年度より2講義減少した。

当日は第1学年の世論・広報委員2名ずつが各講義の司会・進行を担当したが、これは第1学年生徒に本学院の行事を広く知らしめ、学部とのつながりを意識させる非常に良い機会となっている。それに対し、第3学年生徒に学部進学のイメージを持ってもらうためのセミナーでもあるにもかかわらず、彼らの参加者が12年度と同様に少なかった点は問題である。

講義内容は非常に興味あるものが多く、進学学部を決める際におおいに参考になるはずである。本セミナーは自由参加であるので、生徒に対して参加を強制できないが、さらなる生徒への事前の入念な告知など必要である。第3学年生徒に対しては学部進学へ意識を高める意味からも、本セミナーへの参加を促したい。

### c. 学部進学準備セミナー

2月20日（木）に開催した。12年度までと大きく異なる点は、3日間行なわれてきたセミナーが1日のみになったことである。12年度に各学術院からの強い要望を受けて、学術院教員による模擬講義を廃止したが、13年度はその反省のもとに、学部進学後に行なわれるのと同様の講義は実施しないこととした。そのため大教室における全員を対象とする講義は、海外留学について講義のみとした。その上で、進学学部ごとに進学前課題について具体的な進め方の注意を行なった。特にレポート課題における剽窃について厳しく指導した。

12年度と同様、商学部進学にあたっての課題を行なう時間、法学部の感想文の指導、教育学部数学科と先進理工学部の一部の学科の課題に対する対応を行なった。それにより生徒に

計画的な作業と課題提出の重要性を理解させるとともに、教員も生徒の学習の進捗状況を把握することができた。

本セミナーの目的は、学部進学への意識を高め、学部生活への円滑な移行を目指すことであるが、その意識は全ての生徒には浸透しているとは言い難く、教員が厳しく指導せざるを得ない状況もあった。またセミナー期間を1日にしたことについては、特に支障はなかったと思われる。生徒の感想としては、必要な情報を得られたとおおむね好評であった。

#### d. 学部開放科目

13年度は2講座に4名（第2学年3名、第3学年1名）が受講し、全員の成績が優秀であった（評価A：1名、評価A+：3名）。

大学キャンパスへの移動時間の関係で学部開放科目の受講は、これまでおおむね水曜日・土曜日の設置科目に限定されてきたが、13年度はオンデマンドによる受講が1名、夏季集中講座の受講が3名であった。大学との地理的な問題はあるとしても、さらに多くの生徒が参加するよう生徒への広報の充実を図る必要があるだろう。

### ⑦生徒指導

#### a. 生活指導

本学院は、入学定員320名という比較的小規模な学校であることのメリットを生かし、各教員が生徒との関わりを密接にもち、個々の生徒に目が行き届くような指導を心がけている。13年度は、昨年に引き続き以下の3点を重点目標として指導を行なった。

第1点は、「本学院のよき伝統である自由な校風を維持していこう」ということ。自由を享受するためには、それ相応の自覚・良識に裏打ちされた規律が必要である。校則の少ない自由な校風を維持していくためには、各自が本学院生としての自覚を持つことが求められている。

第2点は、「早稲田の学生であることを自覚し、志や気概を持って行動しよう」ということ。多様なタイプの人が集う早稲田において、互いに切磋琢磨していくように目標を高く据え、学識や徳行を深めていく。学識や徳行が深まれば深まるほど、その人柄や態度が謙虚になる。

第3点は、「他者を思いやり、仲間を大事にしよう」ということ。いじめや中傷といった他者を傷つけることはあってはならない。他者に対して謙虚であれば、思いやりの気持ちも生じる。他者へ自らの思いを遣わす「思いやり」の気持ちが、学院全体のマナー向上にもつながっていく。校則が少ない学院であっても、各人が思いやりをもって行動すれば、問題は生じないはずである。

集会などで、こうした心構えを生徒に説き、しっかりと実践するように促した。

上記の方針を実現するための具体的方策として、年間を通じてLHRで生徒へ継続的な指導を行なった。また、課外講義として学外の有識者や専門家による様々な講演を行ない、生徒への啓発を促した。そして教員組織としては、特に組主任は学年集団としてのまとまりを一層強固なものにすべく、学年集会等を通じて学年ごとに必要な生徒への指導を行なった。

13年度は生徒の問題行動による指導処置事例の件数は、1学期4件、2学期2件、3学期0件であった。内訳は、飲酒・喫煙・暴力行為3件、窃盗1件、定期試験での規則違反2件、部外者へのいたずら1件で、17名の学院生が懲戒の処分を受けた。件数の割に処分を受けた学院生の数が多いのは、集団による問題行動が複数あったためである。これら13年度の問題行動で留意すべきは、飲酒、喫煙などが急速に普及するスマートフォン（ライン等）を介して仲間内で情報が共有され、それが慢性化し、仲間内の不仲から嫌がらせ、暴力へと進んだことである。学院生としての自覚を持つよう繰り返し指導を行うとともに、SNS（ソーシャルネットワークシステム）教育の一層の取組みを痛感させられた。

盗難や遺失・紛失物については、正式に届けのあったもので21件、内容は財布、定期券など14件、自転車3件、その他であった。例年に比べると著しく少なくなっているが、実態はもっと多いと思われる。貴重品は肌身離さず携帯し、自転車は必ず施錠するよう、LHRや掲示等で繰り返し伝えているが、今後も継続して指導していく必要がある。

### III. 生徒

#### ①生徒受入

##### a. 入学志願者

14年度入学試験の志願者総数は2476名で、12年度の2491名から15名減少した。女子が 161名と大幅に増加したのに対し、男子が 176名減少した。神奈川県公立高校の入試日が13年度入試では本学院の女子の第2次試験日と重なったのに対し、14年度入試では男子の第2次試験日と重なったことが大きな要因であるが、その要因を除いても、女子の入学志願者が増加傾向にあるのに比し、男子のそれが2000年代初の水準にまで減少しているのが気がかりである。需要に対する受け入れ体制の変更も検討すべきであろう。

##### b. 入学試験

一般入試・帰国生入試・ $\alpha$ 選抜・I選抜の入学者数の次の通りである。

	男子	女子	合計
一般入試	119	58	178
帰国生入試	16	8	24
$\alpha$ 選抜	66	35	101
I選抜	16	6	22
合計	217	107	324

合格者に対する入学者の割合、いわゆる手続率は、一般入試男子が26.9%、女子が35.8%、帰国入試では男子33.3%、女子50.0%であった。一般入試の女子を除いていずれも13年度入試より上昇した。

##### c. 指定校推薦

地元指定校推薦と一般指定校推薦による入学者数は次の通りである。

	男子	女子	合計
地元指定校推薦	7	5	12
一般指定校推薦	5	16	21
合計	12	21	33

13年度入試より地元指定校推薦が5名、一般指定校推薦が8名、合計13名減少した。

##### d. 入試広報

学校説明会としては本学院で開催した3回（7・9・11月）の説明会、大隈講堂での大学主催附属・系属7校の合同説明会（7月）、稲穂祭（10月）の他、出版社・学習塾等主催の国内20会場（23日）、国外2コース（8会場）の説明会に参加し、また6会場で資料参加した。個別相談を受け付けた会場での相談数は男子 646名、女子 410名で、ここでも女子の増加が著しく、募集定員に比して女子の割合が高い傾向は例年以上であった。今後検討すべきこととしては、志願者数の少ない地域の広報の方法であろう。

学校見学は随時受け入れたが、その数は81件であり、これも13年度から20%近く増加した。特に海外居住者のためには必要であるが、効率性からすると、1度の機会にできるだけ多くの見学者を集中させる工夫が必要である。

#### ②生徒への配慮

##### a. 奨学金

学内奨学金の募集は、春と秋の年2回に分けて行ない、学外奨学金の案内も含め、LHRや本学院のホームページを通じて生徒へ広く周知している。

奨学金のうち学内奨学金を受給している生徒は、春季募集15名、秋季募集17名の合計32名である。12年度に比べて1名増であり、いわゆる「家計点」が高い、すなわち経済的に困窮度の高い家庭が多い傾向は変わっていない。

学外奨学金の状況は次の表の通りである。受給者の合計は33名であり、学内奨学金と同様、

経済的に厳しい状況が反映されている。

奨学金名	奨学生数
日本学生支援機構奨学金（学部進学後の支給予約）	13
地方公共団体奨学金	13
埼玉県	13
東京都	3
神奈川県	1
民間3団体奨学金	3
合計	33

また、授業料等軽減補助金を受けている者は、埼玉県83名、東京都42名であった。さらに就学支援金制度受給者は第1学年 324名、第2学年 338名、第3学年 330名で、合計 992名であった。この他に、東日本大震災による被災家庭対象の各種奨学金受給者が1名（学内・学外それぞれ1種を受給）いる。

#### b. 保健室

学校保健計画に基づいて運営することができた。

保健教育としては、各学年に健康教育講演を実施した。クラブ活動でのスポーツ外傷、スポーツ障害が目立つため、今後、予防として専門講師による講習会・相談会の実施を検討したい。また教職員を対象に救急法講習も実施しているが、参加者が少ないので、より多くの教職員に参加してもらうため、実施時期や実施方法を検討する必要がある。

健康管理としては、生徒定期健康診断・教職員健康診断を例年どおり実施した。生徒定期健診の会場である共通教室棟への移動には時間がかかる。早急に95号館に隣接する体育館を建設することが望まれる。

また各校医（眼科・耳鼻科・歯科）による健康相談、整形外科医によるスポーツ障害相談、夏季合宿前・マラソン大会前の健康相談を実施した。地域の校医との連携は必須であり、健康相談は校医が学院・学院生を知る機会もあるので、積極的に活用してほしい。そのため実施時期や周知方法について検討が必要である。

13年度はインフルエンザが大きな流行にならざりに済み、また傷病による保健室利用は12年度と比較すると減少した。しかし、計測等の目的で保健室を訪れる生徒は増加傾向にあり、健康意識の高さも窺える。傷病の手当てはもちろん、健康である生徒も、健康の維持向上のために保健室を利用できることが望ましい。男女共学化以降、メンタルな問題も増加しており、より多くの生徒のニーズを満たすべく、保健室2名体制で、丁寧に関わっていく必要性が感じられる。

#### c. カウンセリング

水曜日と土曜日の午後に、カウンセラー（臨床心理士）による相談を実施している。養護教諭には、カウンセラーと情報を共有し、家庭・組主任等と共に、サポート体制を早期に構築するため、コーディネーター的役割が求められている。各ケースにおいて、より詳細な状況把握のために、組主任や教科担当の教員からの情報が貴重であり、情報交換を密接にしていきたい。

#### d. 共済見舞金

本学院では在学中の生徒の疾病・不慮の事故・災害等による医療費を相互扶助によって補助し、父母の経済的負担を少しでも軽減して安心して勉学に取り組むことができるようにするため、独自の共済制度を設けており、全生徒から年額 5,000円を徴収している。請求申請件数は12年度には大幅に増えたが、13年度は延べ 246名（実数 139名）、支払総額 1,542,334円と例年並みの数値に止まった。

年度末には請求申請期限の厳守や領収書の体裁等に関して、これまでの運用でいまいさを残していた部分の見直しを行なったが、14年度から徐々に改善を図ることにしている。今後は、現行規定では一部支払対象とならない入院規定を整備することが課題となる。

#### e. 学校安全管理

キャンパスが本庄市と児玉町にまたがる浅見丘陵に位置し、その全域が大久保山遺跡であること、さらに自然保護問題の事情もあり、校門や塀がない。こうした都市部の学園とは大きく異なる環境の中で生徒の安全確保に取り組むため、教員日直制を設けている。日直教員は、下校時刻の遵守のために生徒に帰宅指導をするだけでなく、校地巡回により不審者進入の未然防止に努めている。

現実的で科学的な安全管理推進に向け、キャンパス管理室（運営は外部委託）を設置し、キャンパス内のセキュリティを強化している。警備員3名による巡回・点検などマンパワー主体の業務に加え、最新テクノロジーを活用した防災・防犯・監視・入退出機器の設置により、24時間監視体制と緊急時の出動体制を維持している。校舎内のセキュリティ機能は高いが、広大なキャンパスに点在する諸施設のセキュリティレベルをさらに向上させることが今後の課題である。

本庄キャンパス全体としては、労働安全衛生法第19条第1項に規定される安全衛生委員会が設置され、本庄プロジェクト推進室長を委員長に、本学院を含むキャンパス内各箇所から委員が選出されている。委員会は毎月定例で開催され、キャンパス内の安全衛生全般について報告や確認を行なっている。

14年2月に埼玉県本庄警察署との相互連携に関する協定書を締結した。公立校と比較し地元の情報が入りにくい私立学校の特質上、警察と連携を図ることは、生徒の健全育成に資するだけでなく、地域との情報ネットワークを構築し、安全体制を強化するうえでも大きな意義があると考える。

東日本大震災の教訓を踏まえ、地元消防署と協力し、大地震発生を想定した防災訓練を11月21日に実施し、生徒の防災意識の高揚を図った。また生活の様々な場面で生徒が携帯電話等の情報機器を利用する機会が増加する中、違法・有害サイトへのアクセスによる犯罪に巻き込まれないよう、外部から講師を招いて情報教育セミナーを行なった。

### ③生徒進路

#### a. 進学学部

13年度は339名が卒業し、全員が早稲田大学各学部へと進学した。第1志望の学部・学科・専攻・専修に進学した者は250名（73.7%）、第2志望までのそれに進学した者は284名（83.8%）であった。学部・学科・専攻・専修ごとの男女別の進学者数は、次の表の通りである。

学部	学科	専攻	専修	進学者数		
				男子	女子	合計
政治経済学部	政治学科			9	19	28
	経済学科			27	6	33
	国際政治経済学科			7	4	11
法学部				30	16	46
文化構想学部	文化構想学科			12	5	17
文学部	文学科			10	7	17
教育学部	教育学科	教育学専攻	教育学専修	3	2	5
			生涯教育学専修	1	2	3
			教育心理学専修	0	2	2
		初等教育学専攻		0	1	1
	国語国文学科			2	4	6
	英語英文学科			4	0	4
社会科		地理歴史専修		6	0	6
		社会科学専修		5	1	6
	理学科	生物学専修		1	0	1
	数学科	地球科学専修		1	0	1
				2	2	4

	複合文化学科			2	1	3
商学部				20	11	31
基幹理工学部	学系 I			5	0	5
	学系 II			16	2	18
	学系 III			7	0	7
創造理工学部	建築学科			4	4	8
	総合機械工学科			6	1	7
	経営システム工学科			6	1	7
	社会環境工学科			4	0	4
	環境資源工学科			1		2
先進理工学部	物理学科			3	0	3
	応用物理学科			3	0	3
	化学・生命化学科			2	0	2
	応用化学科			2	1	3
	生命医学科			0	3	3
	電気・情報生命工学科			7	1	8
社会科学部	社会科学科			14	3	17
人間科学部	人間環境科学科			0	0	0
	健康福祉科学科			0	0	0
	人間情報科学科			0	0	0
スポーツ科学部	スポーツ科学科			1	1	2
国際教養学部	国際教養学科			8	7	15
合 計				230	109	339

#### b. 他大学進学

13年度の卒業生には、他大学を受験した者はいなかった。

#### c. 退学

13年度中に7名（第3学年：3名、第2学年：3名、第1学年：1名）が、それぞれ一身上の都合により退学した。12年度より2名増加したが、背景には経済的要因も考えられる。

### IV. 研究活動

#### ①教員の研究活動

##### a. 研究成果

###### 著書（分担執筆）

『誰も書かなかった清少納言と平安貴族の謎』

KADOKAWA 13年11月

『教師のための現代社会論』

教育出版 14年2月

###### 注釈書（分担執筆）

『延慶本平家物語全注釈 第三末（巻七）』

汲古書院 13年5月

###### 論文（単著）

「高等学校数学の授業における相互説明法の導入」

『早稲田教育評論』28-1 14年3月

「『栄花物語』巻二七本文の再検討－学習院大学文学部日本文学科所蔵本と伝二条為明筆六半切二葉・小林正直旧蔵本をめぐって－

『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』32 14年3月

「家事紛争の解決－『クレイマー、クレイマー』をどうみるか－」

『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』32 14年3月

「測る向き」

『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』32 14年3月

「境界／辺境論序説－土器づくりからみたアジアの境界と辺境」

論文（共著）	『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』32 14年3月
「Walter Lewin先生の公開授業 – ネット配信される大学の授業	『日本物理學會誌』68-7 2013 7月
翻刻・注釈（共著）	
「資料紹介『有島武郎全集』未収録・有島武郎の浦上后三郎宛書簡一白樺文学館所蔵資料一」	『有島武郎研究』16 13年6月
書評	
「賈小軍著『魏晋十六国河西社会生活史』」	『東洋学報』95-2 13年9月
「書評 山中裕『栄花物語・大鏡の研究』」	『日本文学』66-67 13年9月
雑編	
奥秀太郎監督「星座」映画チラシ	13年10月
奥秀太郎作・演出「銀の匙」DVDジャケット劇評	13年10月
「絲綢之路古城邦國際學術研討会参加記」	『西北出土文献研究』11 13年12月
奥秀太郎作・演出「FREAKS」DVDジャケット劇評	14年2月
奥秀太郎監督「台風一家」映画チラシ・リーフレット	14年3月
コンサート	
音楽ぐるうぶ「歌団缶」第10回「歌の缶詰コンサート」主催	13年7月
神川町「ふれあいコンサート」出演	14年2月
講演	
「Academic Thesis by Students- How to improve the skill of writing thesis?」	
第2回21世紀の中高生のための国際科学技術フォーラム教員セッション	13年8月
「One of the main aims of WaISES 2013- How to improve the students' skill of writing thesis?」	
Waseda International Science and Engineering Symposium 2013教員セッション	
	13年12月
口頭発表	
「Demonstration Lessons: Teaching English with the Movie “Harry Potter and the Philosopher’s Stone” (2001)」	
	the 19th ATEM National Convention 13年8月
「魏晋高台民族状況」	絲綢之路古城邦國際學術研討会 13年8月
「言語使用と言語学習をつなぐための教師の仕事とは」	
	田辺英語教育研究会 13年9月
「高等学校数学の授業における相互説明法の導入」	
	早稲田大学教育総合研究所 第19回公開研究発表会 14年2月
「数学を軸とした課外講義の実践—大学附属高校における数学教育—」	
	数学教育学会 2014年度春季年会 14年3月
「生徒の自立心と協調性を育む寮生活の指導—ルールづくりと行事の運営から—」	
	日本私学教育研究所平成25年度委託研究員研究報告会 14年3月
口頭発表のうち1件が海外でのものである。12年度に3点あった単著は13年度はなかった。	
その他、著書（分担執筆）が2点、論文（単著）が2点減少し、逆に口頭発表は4件増加した。	
各形態の年度ごとの増減はやむを得ない面もあるが、全体的には研究成果は減少したと言わざるを得ない。研究活動の活性化が求められる。	

#### b. 学内研究費による研究

2013年度特定課題研究助成費A（一般助成《交付上限額30万円》）	
「韓国における生活陶器の考古学的研究」	270千円
「3～4世紀における高台社会の研究」	270千円
「高等学校L2リーディングの指導における内容スキーマ指導の有効性に関する実証研究」	270千円

「高等学校物理教材としての放射線検知器の開発」	270千円
2013年度特定課題研究助成費 B	
「墓室画像による鮮卑社会の研究」	250千円
早稲田大学教育総合研究所2013年度公募研究	
「高等学校数学の授業における相互説明法の導入」	200千円
大学の研究費に関する制度の変更に伴い、特定課題研究助成費A（一般助成『交付上限額30万円』）が新設された。そのため12年度より同助成費による研究分が増加した。成果の発表が期待される。	

c. 特別研究期間

「外国語（英語/日本語）教授法研究、生成文法研究」

d. 研究紀要『教育と研究』

本学院専任教員、非常勤講師等が執筆した研究論文や調査報告を掲載し、年1回刊行している。13年度には第32号を刊行し、論文5本を収録した。

## V. 教育研究施設

### ①校舎整備計画

90-7号館（旧芸術科学センター）を改修し、新ホール（名称：稲稜ホール、428座席）、音楽教室、図書室として利用することにした。15年度からの使用を目指している。

### ②学内施設

#### a. 教室

教室は普通教室23、ゼミ室4、理科実験・講義室5、情報処理室2、美術室1、体育講義室2、地理演習室1、音楽教室1、家庭科調理室1、メディアルーム1、C A L L 教室1、大教室1で構成され、各教室にはI T機器とスクリーンが設置されている。

#### b. 大教室

95号館への移転により大教室への移動距離が大きくなつたが、クラブ活動、授業、各種イベント等で頻繁に使用されている。

#### c. C A L L 教室

最新のC A L Lシステム（Computer Assisted Language Learningの略で、コンピュータを使って語学学習を支援するシステム）を搭載した教室であり、①対話形式での学習時には、各ディスプレイの上に設置されているカメラとマイク付きヘッドホンを利用して、相手の表情を確認しながら対話練習すること、②インターネットを活用し、教室にいながらにして教材を広く世界中に求めるこ、③音声や映像を各自のコンピュータに送り、自由に活用すること等の機能をもつ。主に「英語」の授業で使用されている。

#### d. コンピューター・ネットワーク環境

95号館を使用するようになってから、P C室2室（46名対応）を中心に授業や課外活動を展開している。P C室は「情報」・選択科目以外に、情報環境を必要とする様々な教科で使用され、また、休み時間・放課後は生徒に開放し、生徒の創作活動・検索活動に役立てている。この他、全ての教室にL A Nの情報コンセントとプロジェクター・スクリーン・書画カメラが設置されている。また校内3カ所に無線L A Nのポイントがあり、情報コンセントのない場所でもノートP Cやモバイル等のインターネットへの接続が可能である。

このような環境のため、ノートP Cやi P a dを持参する生徒が増えている。校内の至る場所で課題や調べ物に役立てているようである。ネットワークの帯域幅にもストレスはない。

#### e. 体育施設

#### ○学院体育館

95号館は完成したが体育館は新設されていないため、生徒は学院体育館での授業の際には坂を上らなければならず、移動に時間がかかっている。生徒と体育科教員とのコンタクトの便のために体育科教員室を共通棟へ移設したが、それでも生徒の移動に時間がかかるため、体育科教員が生徒に昼休みに指示を出すことは難しく、さらに体育祭や球技大会等、体育行事準備における教員と生徒との連絡は非常に取りづらい。もともと学院体育館は授業をするにはフロア面積が狭く、雨天の場合複数クラスでの授業が困難もあり、早急な新体育館建設が必要な状況である。

#### ○共通教室棟体育館

男女更衣室が2階にあるが、体育科の授業においては、女子に比べ、男子更衣室はほとんど使用されていない。フロアはバスケットボールコートが一面だけ取れる広さであり、主にバドミントンと卓球の授業で使用している。しかし効果的な授業をするには狭く、種目も限られる。この点からも早急な新体育館建設が必要である。

#### ○サッカー場

サッカー場は充分な広さがあり、それを活かした授業展開ができた。整備・維持活動も的確に行われた。13年度には倉庫およびひさしの工事が行なわれ、トイレの新設も含めて利用しやすくなった。

#### ○ラグビー・陸上競技場

ラグビー・陸上競技場は充分な広さがあり、それを活かした授業展開ができた。時間割の関係で、ハンドボールとソフトボールの授業も行なえるように整備した。13年度、倉庫およびひさしの工事が行なわれたが、倉庫が狭いこととひさしの位置が高すぎ日差しをさえぎる用途をなしてないのは問題であり、使用には工夫を要する。

#### ○野球場

野球場は充分な広さがあり、それを活かした授業展開ができた。整備・維持活動も的確に行われた。

#### ○テニスコート

テニスコート6面（クレー4面・オムニ2面）は95号館から近く、生徒の移動は容易である。

#### ○部室棟

部室棟とトレーニングルームは95号館の玄関近くに位置しており、各クラブの清掃・整理が徹底されなければならないであろう。

#### ○屋外施設全般

屋外施設は95号館への移動距離は全般的に短いが、グランドでの活動後、泥のついた靴のままで校舎に入ることも多く、校舎入口でのマット等の整備が求められていた。13年度にはサッカーグラントにトイレが新設され、靴について泥の問題は多少改善された。校舎を美しく保つ上でも今後さらなる工夫が必要であろう。

### f. 図書室

蔵書の管理には図書室内に管理者端末4台と利用者検索端末5台を設置し、Waseda-netを利用した外部からの検索などの環境を整えている。また大学図書館蔵書用の管理者端末や利用者検索端末も設置しており、「取り寄せ貸出」「どこでも返却」サービスによる大学図書館蔵書の利用も非常に活発である。

ただ95号館から図書館へのルートが倒木などのため危険度が増している。利用者への広報は行なっているが、さらにきめ細かい手当が必要である。

### g. 保健室

スペースに余裕があるために、定期試験の保健室受験、医師による健康相談などもスムーズに実施することができた。計測に訪れる生徒が一度に複数訪れても余裕があるため、同時に複数の生徒の対応が可能である。ベッドは現在4床あり、混雑時などは埋まることもあるが、通年の稼働状況をみると、適切な数であると言える。

問題点は保健室から学院体育館、共通教室棟、大教室まで距離があるため、そこでの急な傷病への対応が遅れがちなことであるが、次年度以降改善を図りたい。

相談室はカーペットが敷かれ、12年度と比較すると雰囲気が明るく柔らかくなつた。

#### h. 食堂

食堂はホールとパンショップから構成されている（運営は早稲田大学生協に委託）。生徒の食堂利用時間は、主に10時50分から11時10分までのコーヒーブレイクと13時から13時40分までの昼休みである。食堂の座席数は 442 であり、ピーク時間帯に一時的な混雑は見られるものの、概ね問題はないと考えられる。そのほかの付帯設備として、自動販売機 4 台、給茶機 3 台、食券販売機 4 台が設置されている。

食事時間帯以外は生徒の自習スペースやコミュニケーションの場として有効に活用され、また学校説明会（個別相談）や学年集会などさまざまに利用されている。

#### i. その他

早稲田大学は、芸術活動の発展を目指し「キャンパスがミュージアム」（芸術作品のキャンパス内展示により芸術作品と身近に触れ合える「場の創造」）を標榜しており、本学院も大学が収蔵する絵画や写真の公開を積極的に進めている。13年度は次の絵画 4 点、写真 1 点が展示された。

『ローズの森 Foret de printemps』 嶋田しづ	95号館 1 階会議室
『いつもの散歩道A』 井上悟	95号館 1 階ワークショップエリア
『マンドリンのある卓上静物』 笠井誠一	95号館 1 階ワークショップエリア
『丘を巡る日』 藤野健	95号館 2 階交流ラウンジ
『本庄高等学院空撮2013. 10. 28』 中村孝之	95号館 1 階ワークショップエリア

### ③校地

本庄キャンパスは本庄市郊外に位置する丘陵地の全体で、面積は 856,498m<sup>2</sup>、大学全体の敷地の45%を占める。キャンパスの北端に上越新幹線本庄早稲田駅があるが、12年度の駅南ロータリーの完成後は、95号館までの所要時間が13分である。

### ④スクールバス

朝日自動車株式会社に業務委託して、本庄駅・寄居駅と本学院を結ぶスクールバスを運行している。朝のバスのダイヤがあいかわらず過密であるが、安全性を確保するためにも、バスの台数に余裕があることが望まれる。雨天の日等には本庄便に乗りきれない状態が慢性化しており、始業時刻に間に合わない生徒が多くいた。寄居便に関してはほぼ毎日定員(80名)ぎりぎりでの運行が続いており、約30分間満員状態の車内に閉じ込められていることに対する疑問の声が引き続き上がっている。

### ⑤早苗寮

早苗寮は開設 2 年目を迎えた。男子の入寮希望者が減少したことにより、136名の定員に対し年度当初の入居者数は 126 名にとどまつた。12年度に引き続き、住み込みの寮長・寮母・調理人と、これを支えるパートタイムの調理・清掃スタッフが日常の管理業務にあたり、教員は当番制による巡回指導と寮担任による寮班指導を行なつた。全専任教員による宿直も継続して行なつたが、これは教員が寮の日課や指導の状況を把握するために有意義であった。

寮担任を中心とした学習・生活指導も定期的に実施した。指導にあたつては、規則正しい生活習慣を身につけ、学習時間を確保するために自律させることを目標とした。試験期間中の食堂は学習室としての利用が多くなり、教員が訪問した際に質問に来る寮生も増えた。生活面については、12年度からの課題であったゴミの処理について繰り返し指導を行ない、問題は大幅に改善された。期末試験最終日の居室点検が効果的であった。

12年度に見直した門限のルールはおおむね定着し、寮生からの不満も減少した。寮の門限は自宅通学生にも理解されており、クラスやクラブの食事会等も寮の門限を意識して早めの

時間に行なわれるようになったようである。門限の厳守は寮における指導の最重点項目と考え、門限違反については故意・過失を問わず指導の対象とした。指導後は門限違反を繰り返す寮生はおらず、十分な成果があつたと考えられる。一方、特に長期休暇中の動向について保護者が正確な届けを出さなかつたり、そもそも提出を忘れてしまつたりというケースが多く、指導に苦慮した。また、保護者が所定の書式に外泊願を記入し送信するという手間が煩雑であるという意見もあつた。このことから、寮委員会での検討と教諭会での承認を経て、14年度より外泊願は寮生本人が直接寮長に手渡すという方式に変更することにした。教員・寮長の指導負担の軽減と寮生の意識の向上が期待される。

寮行事は、ボウリング大会・球技大会（バレー・ボール）・クリスマス会を実施した。いずれもリーダー会議の提案によるもので、予算計画から企画・運営に至るまで寮生自身が主体的に行なつた。リーダーたちの実行力・指導力も存分に発揮され、参加した寮生にはおおよそ好評であった。寮生相互の親睦を深めるという趣旨からすれば全寮生が参加することが望ましいが、クラブ活動等を理由に参加しない者がいることが課題して残つた。

また、2月に全寮生を対象とした生活に関するアンケートを実施した。自立心・協調性・公共心が養われたかという設問に対しても、それぞれ80%以上の寮生が「とてもそう思う・そう思う」と回答した。学習・部活動／課外活動・友人関係に関する設問に対しても概ね肯定的に回答しており、特に「友人関係についてよかつた」に対し「とてもそう思う」と回答した寮生は74.3%（「そう思う」との合計は91.7%）に上つた。「早苗寮での寮生活は楽しい」（とても楽しい65.1%、どちらかといえば楽しい26.6%）、「早苗寮での生活をしてよかつた」（とてもよかつた70.6%、どちらかといえばよかつた22.9%）とあわせてみても、寮生は寮での生活を肯定的に評価しており、満足度も高いことが分かった。寮は家庭に代わる生活空間であるから、寮生を精神的に落ち着かせ、居心地がよく安らげる場所としなければならない。安定した寮運営のためにも、定期的に寮生へのアンケートを実施し、意見や要望をすくい上げることが望ましいと思われる。

防災訓練は5月に実施した。避難経路と集合地点の確認を行ない、非常時に備えた。2月に大雪のため物流が数日間寸断され、朝食1回分の食材が届かないということがあり、メニューを変更して対応した。今回は温習日期間で外泊中の寮生が多かつたこともあり対応できたが、災害を想定した備蓄のあり方については今後の検討を求める必要がある。

事業者の早稲田大学プロパティマネジメント、管理会社の共立メンテナンスとの寮運営会議は毎月1回を目安に定期的に行ない、寮運営に関する諸問題について協議した。13年度は新規入寮希望者が少なく、また年度途中からの入寮希望者もほとんどいないため、寮の入居率が低下したことが大きな問題となつた。12年度までは、委託ホームからの移行措置として、海外から保護者が帰国したことによる年度途中の退寮を認めていたが、14年度からは契約上の原則通り認めないものとした（年度末に契約を更新せずに退寮することは可能である）。13年度末には男子12名、女子3名の計15名が契約を更新せず退寮を希望し、結果として14年度の入寮可能数は男子54名、女子15名となつた。一方、新規入寮希望は男子69名、女子19名の計88名で13年度より大幅に増加し、入寮者を選考せざるを得なかつた。15年度は募集数が少なくなる可能性もあり、それにより入寮希望者の減少も予想される。長期的に安定した入居率を維持していくための方策を検討する必要がある。

## VI. 社会・大学との連携

### ①保護者との連携

#### a. 保護者の会

6月8日（土）と12月15日（日）に保護者会を実施した。全体会・クラス別懇談会・個人面談という構成で行なわれ、6月の保護者会では全体会ののち、生徒寮保護者会が実施された。2回の保護者会とも9割前後の保護者が参加し、関心の強さが窺える。各保護者会で、保護者アンケートを実施し、本庄高等学院に対する保護者からの意見を聞いた。6月には7件、12月には6件のアンケート用紙の記入があり、施設や修学旅行の要望があつた。保護者会の運営に対しては満足の声があつた。

## ②卒業生との連携

### a. 同窓会

同窓会との関係は良好である。同窓会にはキャリア教育の一環としてのウィンターセミナーへの講師派遣の協力を依頼している。同窓会活動自体も活発で、役員会は年数回定期的に開催されている。また卒業生の就職活動を支援することを目的にした就職活動支援セミナーも開催されている。同窓会ホームページは、クラス会の開催案内などを含め、近況報告等の情報を随時更新されている。今後は同窓会との関係をさらに強化し、ホームカミングデーを定期に開催できるようにすることが望まれている。

### b. ウィンターセミナー

12月7日(土)に本学院卒業生を講師に招き、9つの講義を実施した。12年度に実施した資格系予備校が主催する講義は行なわなかった。本セミナーは、①生徒が自分の将来を考えて適切な学部選択をしてもらうこと、②先輩の経験談を聞いて、早稲田の学部生あるいは社会人としての具体的なイメージをもってもらい、目的をもって勉学に励んでもらうこと事を主旨として行なわれている。

生徒は事前に聴講を希望する講座に申し込み。講師の選定や講義のテーマは教員と卒業生で行なうが、当日の講師の案内や司会は第1学年の世論・広報委員が担当した。セミナーは2部制として講座を並行して行ない、生徒は2講座受講できるようになった。

講義終了後に行なわれた懇親会では、各講師から貴重な意見が出された。

## ③地域との連携

### a. 本庄稲作プロジェクト

地域と連携を図る試みとして「本庄高等学院稲作プロジェクト」を実施している。地元農家との交流を通じて、農業を取り巻く様々な事柄を体験的に学習することが目的である。農業を軸に、様々な教科や科目が横断的に取り組むことのできる企画である。13年度も美里町農林課と水田農家の協力のもと、6月上旬と9月中旬に美里町下児玉の水田で農業体験を企画した。6月上旬の企画は選択科目「食文化」と「農業と環境」の授業時間帯に組み込む形で行ない、受講生のべ76名が田植えを体験した。9月中旬の企画では、8名の生徒(第3学年3名、第2学年3名、第1学年2名)が早稲田大学の農業プロジェクトに所属する学部学生数名と一緒に、稻刈りと刈り取った稲の「はんで掛け」を体験した。その後、近くの公民館に移動して行なった座談会では、現代農業についての意見交換を行ない、米作りのサイクルや営農に関する興味深い話を聞くことができた。また10月下旬に行なわれた稲穂祭では、美里町で収穫された野菜の販売コーナーが設けられ、来場者に非常に好評であった。農業を通じた地域との連携は着実に進んでいる。

課題としては、稻刈りの参加者が非常に少なかった点が挙げられる。14年度は、稻刈りについても選択科目の授業時間帯に組み込むといった工夫が必要であろう。

### b. 本庄地域「高校生プロジェクト」

本庄地方拠点都市整備推進協議会(会長:本庄市長)による人材育成事業として行なわれた域内6高校の協働プロジェクトに、政治経済部員6名が参画した。13年度の企画は、市内に工場をおく赤城乳業株式会社の人気商品「ガリガリ君」の新しいフレーバーを提案・商品化することであった(協力:本庄早稲田国際リサーチパーク、株よしもとクリエイティブ・エージェンシー)。

この高校生協働プロジェクトへの参加は、13年度で6年目である。年間の経緯は次の通り。

#### ①リサーチ・企画立案

7月30日 赤城乳業本庄千本さくら工場 見学・研修

8月21日 本庄市・神川町 地域めぐり・特産物調査

8月22日 美里町・上里町 地域めぐり・特産物調査

9月21日・11月2日・11月16日 企画会議・プレゼン準備

本庄地域の魅力を活かした商品にするため、フレーバーのみならず、パッケージデザイン、

ネーミング、「当たり棒」の新設計まで構想を広げた。

②企画会議

12月15日（日）

5チームに分かれて、赤城乳業開発部統括部長（執行役員）はじめ5名の社員の前で企画プレゼンテーションを行なった。審査の結果、本学院生徒を含むグループが提案した桜もち味の「ガリもち君」が最優秀案に選ばれ、社員の方々からは「『本庄工場から全国の皆様へ』のコンセプトでぜひ商品化へ向けて検討したい」というコメントをいただいた。また会の最後には、本学院の生徒代表が社員の方々および市長はじめ協議会の方々への御礼のスピーチを行なった。

本プロジェクトに参加する生徒は、毎年、「地域に根ざし、町と人に学ぶ」ことをテーマにしている。生徒にとって本プロジェクトは、地域との連携、学校間交流はもちろん、問題発見・解決（提案）型の学習の機会としても貴重な場となった。14年度以降も積極的な参加が望まれる。

なお、本プロジェクトは『埼玉新聞』12月20日付でも紹介された。

c. 施設の開放

キャンパス内への入退出管理などセキュリティの確保が難しいため、校舎・体育館などの学外への貸与は行なっていない。しかし、本庄市との友好的な協力関係を維持・発展させるため、本庄市民や中学校の陸上競技大会や、公益財団法人本庄早稲田国際リサーチパークと本庄市との連携事業である「こども大学ほんじょう」の修了式に会場を例外的に貸与している。また市民のウォーキングコースやクロスカントリー大会開催にも協力している。

d. ボランティア活動

13年度は以下のようなボランティア活動を行なった。

第3学年による全市一斉清掃

ブラスバンド部による本庄児玉病院での慰問演奏

硬式野球部による少年野球チームとの交流

スーパーサイエンスクラブ河川研究班による以下のプログラム

- ・本庄市立藤田小学校での出張授業
- ・同小学校と合同での河川調査
- ・「川の探検隊」（本庄県土整備事務所主催）における補助スタッフ

また早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）が取り組んでいる「どんぐりプロジェクト」に参加した。これは「海の針葉樹林コミュニティ支援プログラム」の一環で、東日本大震災復興支援を目的とし、宮城県気仙沼市で採取したどんぐりの種を育て、成長した苗木を現地に植樹して防潮林を形成し防災に役立てようとするもので、有志生徒43名が本庄キャンパスでどんぐりの苗木の育成を行っている。具体的には、授業がある日は当番制で本庄育苗地の水やりと観察日誌の記録を行ない、また月に1度程、学部学生やWAVOCのスタッフたちとミーティングを行なって、プロジェクト参加者内の親睦を図り、活動を確認している。夏や冬の長期休暇中にはスプリングラーとビニールハウスを設置した。

稲穂祭では、気仙沼市の菓子店から仕入れたチーズケーキを販売し、利益および募金合わせて4万円を超える額を気仙沼市に寄付した。早稲田祭では、ビデオ通話で早稲田・気仙沼・本庄をつないで互いに質問をし合う会議を行ない、気仙沼の現状や意見を聞くなど、貴重な経験となった。3月20日（木）～22日（土）には生徒24名・教員1名とWAVOCスタッフとで気仙沼どんぐり採取ツアーを行ない、実際に防波林の場所を見たり、現地の方の話を聞いたりした。

④教員の社会活動

a. 学外委員

田辺英語教育研究会 研究企画委員

日本スプリント学会 理事・会計監査

b. 学外講師・出張授業等

第45回国際化学生物オリンピック日本化学会派遣サイエンティフィックオブザーバー

13年7月

「早稲田大学本庄高等学院の卒業論文 指導と評価について」

立命館中学校・高等学校教員研修会 13年7月

本庄市民総合大学「唱歌」講師

本庄市立南公民館「唱歌」講師

本庄市立西公民館「唱歌」講師

本庄市立藤田小学校総合学習講師

日本英語検定協会 面接委員

「ウォーキング講座」（主催埼玉県立川越水上公園）講師

13年6月

「体づくり運動」（主催埼玉県立総合教育センター体育科）講師

13年8月

「ビックリボン体操」（主催埼玉県女子体育連盟）講師

13年8月

⑤教科書等の執筆

a. 教科書等の編集・執筆

『Polestar English Communication II』 数研出版

『情報の科学』日本文教出版

『社会と情報』日本文教出版

b. 指導書・参考書の執筆

『Polestar English Communication I Teaching Manual』 数研出版

⑥外部資金の導入

a. S S H (スーパーサイエンスハイスクール)

基礎枠事業費 9,000千円

科学技術人材育成重点枠 10,000千円

12年度に比べて科学技術人材育成重点枠（10,000千円）の分が増加となった。

b. 科学研究費補助金

「「境界のアジア」に迫る」 300千円

「蜻蛉日記の新資料から江戸期の国学者ネットワークと平安文学享受の実態を探る」

200千円

c. その他

一般財団法人日本私学教育研究所委託研究

「生徒の自立心と協調性を育む寮生活の指導—ルールづくりと行事の運営から—」

200千円

⑦大学教育との連携

a. 教育実習

13年度は、2週間（5月27日～6月7日）の実習生を4名、3週間（5月27日～6月12日）の実習生を7名受け入れた。実習に先立ち、打ち合わせ会を行ない、また実習期間の初日には、オリエンテーションを実施して、実習がスムーズに行なわれるよう配慮した。実習生は教壇実習に止まらず、体育祭の準備や当日の仕事も担当して、広い教育活動の一端を経験してもらった。また支障のない範囲で、放課後の課外活動にも積極的に参加してもらった。その結果、実習生は充実した実習をすることができたと思われる。

b. 学部・大学院等の授業担当

学部・大学院等の授業担当者は次の通りである。

文学学術院	1名
教育・総合科学学術院	2名
スポーツ科学学術院	1名
グローバルエデュケーションセンター	1名

c. その他

教員1名が早稲田大学体操部監督をつとめた。

⑧募金

より一層の教育環境の整備・充実を目指し、創立30周年記念教育研究整備・充実事業募金を展開している。目標額を5億円に設定し、10年4月1日から15年3月31日までの5年間、法人・企業、卒業生、父母、一般の篤志家、ならびに教職員を対象に募金活動を行なっている。「寄付者銘板の設置」（累計額個人6万円、法人50万円、団体20万円）や「稲稟ホール座席芳名プレートの設置」（累計額個人、団体30万円）など高額寄付者を顕彰する方途も打ち出した。教育研究環境整備には、体育館建設など残された課題も多く、創立30周年記念募金以後も、引き続き募金活動が必要となる。しかし第1期生がいまだに50歳に達しない子育て世代であり、多くの卒業生に募金に協力できる家計的余裕があるとは考えづらい。伝統校とは違う視点で、募金を活性化する工夫やアイディアが求められている。

## VIII. 管理運営

①教員組織

a. 教諭会

13年度は定例教諭会を11回（入試判定会、卒業・進級判定会は除く）、臨時教諭会を11回開催した。11回の臨時教諭会の中には生徒指導を議題とする会議が4回含まれるが、12年度よりは減少した。会議時間の短縮化を図ったが、概ね達成できたと思われる。

b. 委員会

13年度は12年度と同じ15の委員会が設置された。各委員会は、1年間を通じてそれぞれの役務を果たしたと考えている。また別に専任教員の採用のため、人事委員会を2回設置した。各委員会の検討事項及び取り組みの主なものは次のとおりである。

教科主任会：予算関係、教育課程、卒業論文の提出時期、修学旅行の見直し、学院行事の検討

学年主任会：奨学生の選考、生徒表彰の選考

生徒指導委員会：日常の生活指導、学校における安全・安心確保への取り組み、問題行動が発生した際の事実確認と生活指導計画の立案と実施

人権教育委員会：人権教育（「携帯安全教室」）の実施、人権教育の実践報告

寮委員会：生徒寮の生活指導、寮規則の検討

広報・出版委員会：『杜』・『研究紀要』の編集刊行

情報管理運営委員会：全般の情報の管理、授業評価の実施

入試検討委員会：『学院案内』の入試部分の作成、指定校の決定、αポイントの部分的見直し、学校説明会における個別相談の実施、各種入試説明会への参加

施設検討委員会：旧芸術科学センターの代替使用の是非と改修の検討

進路指導委員会：各種セミナーの立案及び実施、卒論報告会の準備及び実施、学部説明会の検討。学校行事運営委員会：体育祭、稲稟祭の立案及び運営、芸術鑑賞会の検討

S S H委員会：S S H事業の立案及び実施、課外講義の実施、各種コンテスト・調査旅行への生徒引率、S S H成果報告会の立案及び実施、文部科学省への年度末（中間）報告

国内外交流委員会：台中一中・N J C来校時の対応、留学生の受け入れ検討、各種プログラムの引率

学校評価運営委員会：学校評価の立案、実施依頼、報告書の作成

募金委員会・同窓会：「30周年記念教育環境整備・充実募金」の企画と募金活動、同窓会活動への参加と協力

c. 教科別構成

教員の教科別・年齢別・男女別構成は次の通りである。12年度から大きな変動はない。

教科別構成

教 科	専任教諭	非常勤講師	合計
国 語 科	6	7	13
地理歴史・公民科	7	14	21
理 科	4	11	15
数 学 科	6	8	14
保健体育科	5	4	9
芸 術 科	2	0	2
英 語 科	8	8	16
情 報 科	1	5	6
家 庭 科	1	2	3
第二外国語	0	4	4
人間科学	0	2	2
養 護	1	0	1
合 計	41	63	104

年齢別構成

資 格	人 数	21～30歳		31～40歳		41～50歳		51～60歳		61～70歳	
		人 数	比 率	人 数	比 率	人 数	比 率	人 数	比 率	人 数	比 率
専任教諭	41	1	2%	13	32%	6	15%	13	32%	8	20%
非常勤講師	63	30	48%	14	22%	10	16%	6	10%	3	5%
全 体	98	30	32%	21	21%	15	15%	19	19%	13	13%

男女別構成

資 格	人 数	男		女	
		人 数	比 率	人 数	比 率
専任教諭	41	34	83%	7	17%
非常勤講師	63	44	70%	19	30%
全 体	104	78	75%	26	25%

d. 教員の授業担当時間

13年度の教員の平均授業担当時間数は次の通りである。12年度から大きな変動はない。

専任教員 14.3時間（長期欠勤者は除く）

役職者以外 15.2時間

役職者 7.3時間

非常勤講師 6.7時間

②事務組織

事務職員の担当別人数は次の通りであり、12年度から大きな変動はない。なお、専任職員および嘱託の嘱任・解任および配置転換は大学が行ない、派遣スタッフについては、大学が契約窓口となり人材派遣会社から派遣されている。

事務所	12名
事務長	1名（専任職員）
学務係	6名（専任職員4名・派遣2名）
庶務係	5名（専任職員2名・嘱託1名・派遣2名）
図書室	3名（専任職員1名・派遣3名）
理科準備室	2名

物理・生物	1名 (嘱託)
地学・化学	1名 (派遣)
メディアルーム	2名
S S H支援	1名 (嘱託)
C A L L教室	1名 (派遣)

### ③生徒の出欠席・成績処理

13年度より、早稲田大学オープンソースソフトウェア研究所が開発した学院向け教務システム “School N@vigator” を導入した。同システムはリレーションナルデータベース化による情報の一元管理を特長とし、高度なセキュリティ保持や容易なデータ抽出・加工が可能になった。ユーザーインターフェースとしてWebブラウザが採用されていることも、操作性や利便性の向上に役立っており、特に教員についてはデータの閲覧・編集がパソコン環境さえ整えばどこからでも可能になった。今後は、生徒の保健管理などシステム化されていない事項など、ユーザーの希望を取り入れながらシステムの改善に取り組みたい。

具体的な運用は以下の通りである。

出欠席管理：科目担当者（教員）が毎时限の出欠席を入力した後、学期毎に組主任が欠席理由、通知表用所見を入力する。その他、学校行事など一括入力が必要となる例外対応や集計処理は、職員が管理する。

成績管理：科目担当者が生徒の成績を入力した後、チェックから確定処理までを教員が行なう。成績通知表・指導要録・調査書等の成績関連帳票の自動出力が可能となっている。進学学部への成績提出時など一括処理やデータ集計が必要な部分については、職員が編集・管理を行なう。

### ④広報

広報誌として『緑風』と『杜』を発行している。『緑風』は6月と12月に発行したが、教員や生徒が執筆するコラムや行事報告、クラブ活動の戦績報告などで構成された。『杜』は保護者の会「杜」編輯委員会により年1回発行される「保護者の会だより」で、同委員会の自主的な取材・編集により、学院施設や生徒行事・トピックの紹介、保護者の会の活動報告などを掲載している。13年度は3月に発行された。

ホームページ (<https://www.waseda.jp/school/honjo/>) を9月6日に全面的にリニューアルした。今回のリニューアルでは、提供するコンテンツ全体の統一感を重視し、ページ移動時の違和感や混乱を解消した。またタイムリーなニュースやできごとを継続的に発信することを主眼とし、トップページの写真やリード分を見るだけで、本学院の最新の動向が伝わるように改善した。